

李秀賢氏の事故後の20年の軌跡への一考察*

－「韓国と日本の架け橋」として－

俵木はるみ**
springriver@kw.ac.kr

<目次>

- | | |
|-------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 3. 交流事業と奨学金事業 |
| 2. 追悼 | 3.1 李秀賢記念事業 |
| 2.1 追悼式 | 3.2 美しい青年・李秀賢の集い(アイモ) |
| 2.2 追慕の文化活動 | 3.3 LSHアジア奨学会 |
| 2.2.1 出版 | 4. おわりに |
| 2.2.2 映画 | |

主題語: 韓国と日本の架け橋(bridge between Korea and Japan)、あなたを忘れない(I won't forget you)、草の根レベルの交流(grassroots-level interaction)、20年変わることなく(without change for twenty years)、持続可能(sustainable)

1. はじめに

李秀賢氏の事故があった2001年には、日本と韓国の外交関係は日本の歴史教科書問題で揺れていた。2000年度の「外交に関する世論調査」¹⁾では、日本人の韓国に対して「親近感を感じる」が「感じない」を逆転し50%を越えた。なぜなら1998年の金大中大統領と小淵首相の「日韓共同宣言」により両国の地方自治体や民間レベルでの交流事業も盛んになり始めていたところであり、韓国は日本の文化に対して開放政策を取り始めていたところだった。ところが日本の植民地支配を記述した教科書を「自虐史観」と批判した扶桑社が2000年に「新しい歴史教科書」を作り、文部省の検定に通過する可能性があることが韓日の外交問題となった。韓国では政府に加え地方自治体や民間レベルでも、日本に対する対抗措置に乗り出し交流事業の中止を通告してきたりした。

* 본 논문은 2021년도 광운대학교 교내연구비에 의해 연구되었음.

** 광운대학교 글로벌교육센터 교수

1) 内閣府大臣官房政府広報室「外交に関する世論調査」<http://survey.gov-online.go.jp/h26gaiko/zh/zll.html>

2003年から韓国のドラマ「冬のソナタ」によって韓流ブームが始まり、2009年から2011年まで日本人の60%余りが韓国に親近感を感じると答えるまでになった。しかし2012年に李明博大統領が独島(竹島)を訪問し天皇の謝罪を要求した事をきっかけに、それまで匿名サイトやブログに閉じ込められていた「嫌韓」感情を一気に大衆化してしまったと言われる程、日本人の韓国に対する好感度が前年度(11年度)の62%から38%へと激減し、反対に韓国に対する非好感度が激増した。2013年から14年にかけて新聞、テレビなどのマスコミを始め、韓国を批判する「嫌韓」本が書店にあふれ、街頭では在日コリアンに対するヘイトスピーチが繰り返されるという状況が展開した²⁾。

2019年の調査では韓国に親しみを感じないと答えた人は71.5%と、日韓関係は最悪状態になった。2019年7月に日本政府は韓国に対して輸出規制強化をすることを発表した。これは、前年度に韓国の最高裁で元徴用工訴訟において日本企業敗訴の判決が確定された事に対し、韓国政府が放置していることにいらだちを感じた日本政府が、韓国政府に対応を促すために施行したことだった³⁾。しかしそれに対する韓国政府と国民の反応は、日本政府の意図とは全く別のものとして現れた。韓国政府は対抗措置として産業の対日依存度を減らすための技術開発へ大規模な支援を発表し、日本以外からの代替品輸入を進める一方、国民は日本製品不買運動を展開した。その結果、日本の観光地経済や素材メーカーは業績が悪化し、韓国の旅行社や航空会社も打撃を受けた。このように日韓関係は、常に歴史認識問題が外交問題と絡み合いながら、未来指向へ向かっていけない状態で滞ったままである。

日韓関係を3つのレベルに分けて考えるならば、第一に政府間の関係で、国家利益を中心としたもの、第二に有識者のレベルでの合理的な対話、第三に一般の日本人と韓国人を中心とした草の根レベルの交流である。これまでの日韓関係において、政府間の関係が草の根レベルの交流に影響を及ぼしその関係を断絶させる状況が繰り返されてきた。そのような状況のなかでも李秀賢氏の遺志である「韓国と日本をつなぐ架け橋」は20年間、変わることなく営まれてきたのである。それを可能にさせた原因は何かを明らかにすることが本稿の第一の目的である。李秀賢氏の事故後、日本全国の人達から両親に寄せられた手紙⁴⁾に最も多く記されていた言葉が、「あなたの勇気を忘れない」である。また、母である辛潤賛氏が事故後、出版した著書に、本を出すことを決めた理由の一つとして、「日本中のマスコ

2) 俵木はるみ(2016)「日本の『嫌韓』に対する韓国と日本の認識に関する考察」『日本語教育』vol.78、pp.155-157

3) 澤田克己(2020)『反日韓国という幻想』毎日新聞出版、pp.101-107、pp.195-197

4) 佐桑徹(2002)『李秀賢さん、あなたの勇気を忘れない』日新報道、pp.72-116

ミが多すぎるくらいの報道をしてくれたが、一年も経てば煙のように消えてしまう」だろうが、「一冊の本にまとめておけば、ずっと後までスヒョンの思い出をとどめておける」⁵⁾と記している。両者に共通している「あなたを忘れない」という思いが、事故後の20年間、追悼式、出版、映画、奨学金事業、日韓交流事業という形で展開されてきた。これらの事業を通して李氏の精神が伝えられていくことがこれからも持続可能かどうかを考察することが、本稿の第二の目的である。これら二つのことを明らかにするために、追悼式、出版、映画、交流事業、奨学金事業について考察していく。

2. 追悼

2001年1月26日、東京のJR新大久保駅で、ホームから転落した人もその人を救助しようとした二人も亡くなった。その二人とは、日本人の関根史朗氏と韓国から来た就学生の李秀賢氏だった。

2.1 追悼式

追悼式は李秀賢氏が通っていた赤門会日本語学校で学校葬が行われたが、当時の森喜朗首相、福田康夫官房長官、田中真紀子前外相をはじめ一般市民など五百名余りが参列した。この事故は日本全国を揺るがした衝撃的な出来事だった。日本の新聞は事件を一面で報道し、「他人のことで見て見ぬふりをする日本社会に秀賢さんのような若者がいるだろうか」と評するくらい、韓国人の李秀賢氏をクローズアップして報道した。全国から二人を悼む数多くの手紙と共に見舞金が新聞社に送られてきた。

一周忌の慰霊祭は李氏と関根氏のために一緒に行われたが、二周忌からは「故李秀賢君を偲ぶ会」として日本で毎年行われ、両親も韓国から参加した。十周忌を節目として公式開催は一区切りをつけた。その時、東京新聞は一面に「李氏の精神は日本人の韓国に対する見方を大きく変えて、『韓流ブーム』のベースを作った」と評した⁶⁾。十周忌の「偲ぶ会」には会場に入りきらないほどの約300人が参列し、「死んで尊敬され勲章をいただく息子より、親に

5) 辛潤賛(2001)『息子よ! 韓日にかける「命の橋」』潮出版社、pp.4-5

6) 「李氏の信念と勇気を伝えていく」『東京新聞』(2011.1.16)

心配をかけながらも愛され、平凡であっても親のそばで生きてくれることを望むのが、親の率直な気持ではないでしょうか」と語った父・李盛大氏の講演に目頭を押さえて聴き入る人も目立った⁷⁾。

十一周忌以降も両親は毎年、新大久保駅で献花をするために訪日したが、当時、新大久保の街頭では在日コリアンに対するヘイトスピーチが繰り返され、日本全国の書店には嫌韓本が山積みされるという状況下だった。十二周忌と十三周忌には、道徳の副読本に掲載されている李氏の話しを元に「命の大切さを考え、李秀賢さんのとった行動を考える」という公開授業している小学校を両親が訪問した。埼玉県越谷にある小学校では2007年から道徳の副読本に掲載されている「ラッシュアワーの惨劇」を勉強しながら‘命の大切さ’について学んできたという。6年3組の31人が、アルバイトをしながら日本語を学んでいた李氏の生活や、事故当時の様子などが書かれた文章を読み、意見を出し合った。李氏の行動について「とっさに『助けたい』と体が動いたのではないか」「自分の命が危ないと分かっていたけど、助けないと後悔すると思ったはず」など思いを巡らせながら話す子供たちの姿に感動し、母・辛潤賛氏は「こんなに熱心に勉強してくれる子がいるなら、息子の夢は叶うと思う」と語った⁸⁾。やはり教育現場で教科書を通じて次の世代に伝えていくことが、最も重要であると痛感する。

十七周忌までは両親が新大久保の駅で献花をしてきたが、十八周忌の二ヶ月後に父の李盛大氏が死去し、5月24日に日本で追悼式が行われ60名余りが参席し最後の道を共に慰労した⁹⁾。当時の河野太郎外務大臣は「李秀賢氏の勇気ある行動に、多くの日本人は感動した。(父君と息子さん)お二人の遺志のともしびが消えることなく、これからもともし続けていく決意を新たに誓う」というメッセージを送った。この追悼式及びメッセージを通して、李秀賢氏の遺志が事業として20年間続けられてきたのは、両親の人柄と功績に負うところが大きいことがわかる。二十周忌を迎えて釜山韓日文化交流協会¹⁰⁾が、「義人李秀賢二十周忌記念事業」を推進した。そのうちのひとつとして追悼会は釜山にある故人の墓前で、韓日合同追悼式を執り行い、丸山駐釜山日本国総領事も参加した。

一方、事故から時が経過しても釜山ヨンラク公園にある故人の墓を訪れる日本人が跡を絶たず、花籠だけでなく透明ケースに入れた千羽鶴を捧げていった人もいる。又2011年か

7) 「新大久保駅救助死10年、父語る」『朝日新聞』(2011.1.27)

8) 「留学生の両親が道徳の授業見学 新大久保駅で救助死」『朝日新聞』(2013.1.30)

9) 「日韓対立越える強い絆」『朝日新聞』(2019.6.1)

10) 釜山韓日文化交流協会は、1987年釜山光復ロータリークラブの会員たちが主軸となって誕生した社会法人で、両国の若者の交流と教育のための事業を積極的に展開している。

ら福岡県の三井中央高校が修学旅行で生徒たちを連れて来ている¹¹⁾。李氏の勇気、人間愛、日韓の架け橋になりたいという彼の夢について学び、感じてほしいという思いからはじまったという。ここに李氏が日本人の心に与えた影響の深さを読み取ることができる。その死を悼むだけでなく、次の世代にそれを伝え、日本と韓国の架け橋になってほしいという願いがこめられている事例である。

また日本人の篤志家の小島良治郎氏は「李秀賢氏の勇気ある犠牲性に対し感謝を捧げたい」と韓国の総領事館に伝え、故人の母校であるナクミン小学校に李氏の胸像と追悼の碑が建てられた。このように李氏を記憶するための顕彰碑や記念碑は、2001年に新大久保駅と赤門会日本語学校に、2002年に「韓日友好記念碑」が宮城県白石市に、故人の小・中・高校及び高麗大学に、釜山のオリニ(子供)公園に建立された。故人を記憶するためのものは、追悼式や記念碑・顕彰碑だけではなく、出版、コンサートや音楽会、映画などの文化活動へと広がっていった。

2.2 追慕の文化活動

文化活動としては、出版、映画の他にもコンサートや音楽会、朗読劇など多数催されたが、ここでは出版と映画について述べる。

2.2.1 出版

日本では合計七冊の書籍が出版された。母・辛潤賛氏が「息子よ！韓日に架ける『命の橋』」を執筆し、事故から50日目の2001年3月16日に出版した。母親として「息子を失った悲しみを、これから死ぬまで忘れることはできない...手記を出版すべきかどうか、正直、迷いがあった」が、「それでも本を出すことにした理由は、いくつかある」という。一つには「事故についての報道で、息子が余りにも美化されすぎて--息子が自分の息子ではなくなってしまうような、一抹の寂しさを感じたという。編集者からの「ごく普通の青年であったことを、ありのまま出す本にしましょう」という言葉を聞いて、「息子の思い出を綴る気になった」という。もう一つの理由は、「信じられないほどたくさんの日本の方々が、スヒョンの死を悼み、声をかけてくださり--その方々の言葉の一つひとつが私たち残された家族にとって、どれほど力を与えてくれたかわかりません。--その方々に、本を通じてお礼を申

11) 「特派員リポート@釜山-日韓関係を思う若者たち」『朝日新聞デジタル』(2015.8.4)

し上げたかったから」¹²⁾だという。そして二十周忌を迎えた2021年に増補版「息子よ!韓日に架けた『命の橋』の20年」に第6章「息子の遺志を受け継いで」が追加されて出版された。増補版の題名が、初本での「韓日に架ける」から「架けた」に変わっていることから分かるように、息子の遺志を継ぐために年に2回以上、両国を往復しながら、20年の間に両親のもとに寄せられた二千通以上の日本人からの手紙を理解するために日本語を学び、簡単な日常会話はできるようになり、現在は亡き夫の分まで「韓日友好の架け橋」の事業をしっかりと守り続けると結んでいる¹³⁾。

事故から一年目、東京新聞の記者であった佐桑徹が「李秀賢さん、あなたの勇気を忘れない」を出版し、本の印税は全額奨学会に寄付すると記している。事故当時の様子と報道された記事に始まり、李氏の幼いころからの成長過程とギターとスポーツを愛した大学時代の様子、日本に来てマウンテンバイクで富士山の頂上まで登ったことなどを描き、日本全国から寄せられた手紙の内容も掲載している¹⁴⁾。その他に、童話「いのちの音」(著者:吉川良)、詩集「韓国の星・李秀賢君に捧ぐ」(著者:小山修一)、「あなたを忘れない」(著者:康熙奉)、「勇気の一瞬」(著者:夫址栄)、「李秀賢物語」(著者:佐桑徹)がある。

韓国では二冊の本が出版された。李氏の犠牲精神に感動した牧師である金永培が、私費で「우리에게 사랑을 보여 준 이수현의 여행(私たちに愛を見せてくれた李秀賢の旅行)」を出版し、印税は李氏の奨学会に送るとした。内容は、事故後、インターネットに寄せられた三万余件の追悼のメッセージのうちの245件と、生前、李氏がホームページに書き残した自転車旅行記と事故当時の報道記事などである。

釜山韓日文化交流協会は、20周忌記念事業として李秀賢の一代記を記した評伝「李秀賢、一月の陽光¹⁵⁾」を出版した。日本では事故後一年もしないうちに多くの書物が出版されたが、韓国では李氏の両親や友達が語る李氏との出来事や成長の様子などが写真と共に初めて公開された。4月に駐釜山日本国総領事館と合同主催で、高校生と大学生を対象にこの本の読書感想文を募集し、各3名ずつに10日間の日本研修を授与した。また5月には、「李秀賢、一月の陽光」の出版記念ブックコンサートと追慕音楽会を開催し、コロナで3分の1しか入場できなかったが、現場は200人、同時ストーリーミングで500人以上が接続した。ブックコンサートでは著者である張氏が司会をして3つのグループに分かれてインタビュー

12) 辛潤賛(2001)『息子よ!韓日に架ける「命の橋」』潮出版社、pp.1-5

13) 辛潤賛(2021)『息子よ!韓日に架けた「命の橋」の20年』潮出版社、pp.163-199

14) 前掲書4)

15) 張ヒョンジョン(2021)『李秀賢、1月の陽光』호밀밭

をした¹⁶⁾。

2.2.2 映画

「あなたを忘れない」は2007年に韓日合同で、ドキュメンタリー「かけはし」は、第1章と第2章が2017年に製作されたが、現在、第3章が製作中である。

(1) 映画「あなたを忘れない」

監督は花堂純次で、2004年に依頼された時は「一度も韓国を訪問したこともなく、特別関心の高い地域ではなかったが、李さんに関する書物を読み、友人たちから話を聞くにつれ、気持ちが高まった」という。2005年の竹島(独島)問題から続く日韓関係の悪い雰囲気の中、釜山ロケが行われた。「映画のなかで在日コリアンの問題など、ナーバスな部分が含まれており、実際、感情的になったスタッフ数人を外したこともあった」という。しかし「韓国を知らなかったこと、最初から理想の関係でなかった」ことが、逆にスタッフたちの努力を生み、「作品の質を高めた」と自負する¹⁷⁾。ストーリーは、実話を元に多少のフィクションを交えている。日本に留学したイ・スヒョンは、東京の路上でストリートミュージシャン星野ユリと出会う。故郷でバンドを組んでいたスヒョンはユリと意気投合し、音楽を通して親交を深めていき、やがて友情が恋へと発展するが、事故となる。

2007年の六周忌に行われた試写会に、天皇皇后陛下も両親のすぐ隣の席で観賞し、100人を越す取材陣が集まり次の日から全国180個所で上映された。試写会後の記者会見では、母・辛潤賛氏が、皇后陛下から「命を落とされて残念ですが、立派な息子さんですね」と慰めの言葉を受けたこと、花堂純次監督が両陛下より「この映画が日本と韓国の橋渡しのいいスタートになるといいですね」と声をかけられたことを話した¹⁸⁾。それに引き替え韓国からの反応はなく、試写会では言論人や映画関係者は殆んど見られなかった。その場に参席した秀賢の役をした李テソン氏に、日本の記者が「韓国ではすでに忘れられたニュースなんではないか」と質問した。李テソン氏は自身のミニホームページに「恥ずかしかった。天皇が映画の試写会に来た理由は、日本人を救おうとして亡くなった李秀賢氏に対して深い哀悼を表している。‘あなたを忘れない’は、韓国と日本の両国の間にある積み重なった沈殿物

16) ブックコンサートは3つのグループに設定された。1グループは故人の母と妹、2グループでは親友二人と赤門会の事務所長、3グループでは国際交流基金のソウルセンター所長と釜山韓日文化交流協会理事長である。(釜山韓日文化交流協会が提供してくれた動画を視聴)

17) 「韓国と私・逆境が作品の質高めた」『朝日新聞』(2007.2.27)

18) 「君の勇気私たちも-韓国学生ら駅で救助死から6年」『朝日新聞』(2007.1.27)

を払い落とすという意味があると思う」と書いた。韓国での上映は、次の年の2008年10月に韓国の電気部品販売業を営む男性の資金提供により初めて可能となった。

この映画に対する反応において、どうして日本と韓国ではこのような違いが生じたのだろうか。事故当時の日本と韓国の報道の仕方の違いについて、李氏の事故に対する「韓国と日本の文化への視角の差が現れた」と高麗大学の金采洙教授は指摘し、次の様に語った¹⁹⁾。「韓国では一般人が水に溺れた人を助けたり、強盗を追い払ったという話が時々ある。...したがって秀賢さんは場所が日本であれ、アフリカであれ、そうしたと思う。日韓友好を考えてやったことではない。人間として当然のことをしたとして、比較的冷静に報道されたと思う」とし、日本の洪水のような報道については、「日本人は、嫌われていると思っていた韓国人が、日本人を救うために命まで投げ出したことに文化的衝撃を感じた」と解釈した。

次にこの映画に対する評価を見てみることにする。韓国での観客数は72,895人、映画の評価²⁰⁾は、記者・評論家は2名が10点満点中3, 5と辛い点数で、ネティズンは366名が参与し平均が7.71である。366名の点数を調べると、最高点は10点、最低点は1点と格差が激しく、6点以下のコメントで最も多かった意見は、韓国人をたて過ぎている、演技が下手、李氏の事よりユリの方に比重を置きすぎている、日本人の視点でだけで作られているなどである。

日本のネティズンの映画の評価は、幾つかあるが、参加数が最も多いYahoo²¹⁾は952件で平均点が1.6点と非常に低い。その内訳は、5点9%、4点5%、3点4%、2点4%、1点79%である。1点をつけた割合が8割もいる理由を知るために、1点のレビューの中で685人から役に立ったと支持されている意見を見てみると、「関根さんの遺族の同意を得られなかったら、この映画を作らないというのが常識ある人間の取るべき道だ。韓国人を美化し、日本人を悪意を持って描写している」というものであった。映画作成の経緯に関して直接取材をした記者によると、関根さんの遺族は「そっとしておいて欲しい」と企画段階から取材はさせてもらえず、了解を得ることができなかった。李さんの両親からは「日韓の友情と架け橋になるように制作される映画なら」と了解を得られたので、この映画は李秀賢英雄譚ではなく、一人の青年イ・スヒョンの夢と恋を描いた青春映画として作成されることになったという。1点のレビューを通して、事故で犠牲になったのは李さんだけでなく関根さんもいるの

19) 前掲書4)、pp.64-65

20) naver映画評価<https://movie.naver.com/movie/bi/mi/point.naver?code=57666#tab>

21) yahoo japan 映画評価 <https://movies.yahoo.co.jp/movie/326060/>

に、韓国の留学生である李さんだけに焦点が当てられて関根さんは影の存在になっていることに対し納得できない人が結構多いことが明らかになった。「漫画 嫌韓流」の著者である山野車輪は、ワールドカップの時に日本の大手マスコミの韓国を非難する事を避けていると思われる報道姿勢に反発を感じたことが、ネット上の「嫌韓」の発火点であると指摘した²²⁾。これは「韓国人を美化し、日本人を悪意を持って描写している」事に対する思いと共通するものがある。

(2) ドキュメンタリー映画 「かけはし」

‘かけはし’とは、途絶えた橋の両側をつなげることである。構成は二章からなっていて、第一章「I'm a Bridge!」では、関係者達のインタビューから秀賢さんの生涯を浮かび上がらせると共に、事故後に李氏の両親とLSH奨学会がしてきた活動、奨学金をもらった留学生の姿を描く。第二章「足跡をたどって」では、日韓の国交正常化50周年を迎えた2015年、釜山から来日した22人の大学生が李氏と縁のある地域を訪れ、日本の若者たちと交流した一週間の旅に密着し、学生達の心の変化に迫っていく。例えば「一緒に遊んで楽しむだけで何になるのか」と交流に否定的だった男子学生が、日本の大学生と歴史認識の違いについて意見を交わしたりするうち、前向きになった。試写会に参加した人の感想は「日韓関係が悪化する中、どうすればよいのかを考える切っ掛けになった」「日韓友好が広まっていくように、私たち一人一人が何か自分ができることを見つけて、行動することが大事だと思った」などである²³⁾。これらの感想を通して、この映画が見る人々に、自らも架け橋になろうとするインパクトを与えていることがわかる。

この映画を企画・製作した中村里美氏は、「誰でも国籍や民族を越えて、国と国、民族と民族をつなぐ‘かけはし’になれるという意味で、この題名をつけた」とし、「これを見て一人ひとりができることは何か考えてほしい」と話した²⁴⁾。中村氏は、ピース登山隊²⁵⁾の主催者でもあり、LSHアジア奨学会の理事としても活動している。最後に「李さんの両親のように、変わらぬ姿勢で地道に誠実に取り組むことの大切さを伝えたい」と述べた。

2017年から日本全国を回りながら、映画館だけでなく自治体、中・高・大学、図書館、

22) 俵木はるみ(2015)「日本の新聞に現れた‘嫌韓’言説の意味への考察」『日本近代学研究』Vol.50、p.126

23) 「記録映画、11日から十三で上映」『朝日新聞』(2017.2.9)

24) 「日韓かけ橋に映る遺志」『朝日新聞』(2017.2.2)

25) 韓日の架橋になりたいという李氏の遺志を継いでいくという目的で、故人が山岳自転車に登った富士山に李氏の遺影をもって、2001年に留学生と日本の市民60名が登った。中村氏は「頂上に立った達成感を共有すると日韓の若者の一体感がぐっと強まる。その感動を大切に交流を進めたい」として、毎年夏に韓日の若者が富士山や韓国のハンラ山に登った。

美術館、お寺、教会、ライブカフェなどで自主上映を続けている。映画を見て感動した人が次の上映会を企画するという形で広がっている。韓国でも2019年6月に日本国際交流基金ソウル文化センターで初上映された。現在はzoomでオンライン上映会を毎月している²⁶⁾。

3. 交流事業と奨学金事業

3.1 李秀賢記念事業

李秀賢記念事業は、日本国際交流基金ソウル文化センターが、韓日協会、高麗大学の日本研究センター、釜山韓日文化交流協会、駐濟州日本国総領事館などの韓国の機関と協同で実施している事業である。日本語を学習している韓国の青少年を日本に招待し、研修旅行を通して日本の社会、文化、日本語に対する理解を深め、日本の青少年と交流する機会を提供するものである。この事業は2002年から始められ2022年1月17日から28日までの11泊12日間の研修で21期を迎える。募集人数は当初10名だったが、6期から8期まで20名、9期から13期まで30名と増加し14期からは20名前後で、20期までの研修生は397名になる²⁷⁾。国際交流基金ソウル文化センター加藤所長がブックコンサートで、「多くの国と行われていた高校生のプログラムは全てカットされたが、この記念事業だけは唯一残って続けられているものであり、それだけ重要な事業である」と語った。募集人数から見ても当初の10名から平均20名に増加し、日本語の普及と日本文化の伝播という目的を持つ国際交流基金として、その目的を十分に果たしている事業として評価していることがわかる。

15期の研修の日程を見ると、李氏の命日である1月26日に新大久保駅を訪れ、次の日に関西に移動し泉佐野市の府立佐野高校の学生達の家にもホームステイして、授業参加や交流会をしてその後も連絡を取っている学生もいる。佐野高校はそれまで300人ほどの韓国の学生達を受け入れてきたが、来日した韓国の生徒達の中からは日本の大学へ留学する学生もいるし、佐野高校の生徒達の中には交流を機に将来の進路を韓国と中国との共同プログラムがある立命館大学に決めた学生もいる²⁸⁾。参加した韓国の学生の感想は「(李さんは)国家的な感情にとらわれず、人間的にその人を救おうとした。その精神を学びたい」「両国が良い

26) ドキュメンタリー「かけはし」のHP <https://kakehashi-movie.net/>

27) 日本国際交流基金HP https://www.jpf.or.kr/index/s4/s4_3_2.php

28) 「日韓の懸け橋 遺志脈々-佐野高で交流会」『朝日新聞』(2016.2.1)

パートナーになれるよう、自分も役に立ちたい」などである²⁹⁾。

研修後の参加者の動きとしては、2008年にソウルで初の同窓会を開いた時、それまでの90人の研修参加者のうち18人が参加した³⁰⁾が、それ以降は何もなされてないという。1期の研修生達は現在40代前半になり、各自の分野で活躍しているだろう。約400名になる研修生達が高校時代に体験した日本研修を横軸として、李秀賢氏の精神と韓日の架け橋を縦軸に、政治・外交に左右されない草の根レベルの「韓日の架け橋」ネットワークを作っていくことはできないだろうか。

3.2 美しい青年・李秀賢の集い(アイモ)

釜山韓日文化交流協会は2010年5月、韓国と日本の大学生たちが参加する「美しき青年・李秀賢の集い(韓国語の略称アイモ)」の初めての交流会をもった。これを企画した河淑警務事務局長は、「これまで日本では故人を追慕する多様な行事が多く行われてきたが、むしろ故郷である釜山では不足していた」とし、釜山にいる日本人留学生と釜山地域の韓国の大学生を中心に集まりを結成した。2年目からは、街頭に出て映画「あなたを忘れない」のパンフレットの配布や李秀賢名誉道路名のための署名活動を行ったり、「21世紀の韓日関係において若者たちの役割」について討論もした³¹⁾。また30人の学生を3つのグループに分けて、李秀賢氏の生きた26年を3期³²⁾に分けて調査してから、両親を招待して発表したりした。

釜山韓日文化交流会のアイモを主管している河事務局長は「十周忌までは追慕の行事だったが、これからは李秀賢氏の精神をどのように継承していくかが課題だと思う」とし、アイモを推進してきた。大学生達に李氏の26年間の生涯を探究して発表させるプログラムをしてきたが、それ以外の何か他のアイテムはないか模索中だという。これからは中・高生を対象に「韓日の架け橋になろう」とした遺志と「他の人を配慮する心」を受け継がせていくプログラムを考えていると語った³³⁾。

29) 会報『かけはし32号』(2018)LHSアジア奨学会、pp.3-5

30) 「日本で研修した韓国人集う」『朝日新聞』(2008.7.5)

31) 『協会30年史:アイモ』(2017)釜山韓日文化交流協会、pp.84-87

32) 1グループは出生から高校時代まで、2グループは大学時代から日本へ行く前まで、3グループは日本の留学生活から現在までとした。

33) 2021年11月4日に筆者が釜山韓日文化交流協会事務局で河淑警務事務局長にインタビューした。

3.3 LSHアジア奨学会

LSH(李秀賢のイニシャル)アジア奨学会は、李氏の両親の「母国と日本の架け橋になることが目標だった息子の遺志をついで、日本で勉強している就学生³⁴⁾を支援する奨学金を作るために役立てほしい」という気持ちから始められた。赤門会の新井理事長が両親からの提案を受けて、事故から一年後の2002年の1月26日に発足した。事故直後から赤門会日本語学校に、また新聞社に日本全国から見舞い金が寄せられ、そのうちの一千三百万円を両親が奨学会に寄付した。これまでの20年間の奨学会の運営は、両親の寄付と日本の250名程の一般市民などからの募金で続けられている。収入の内訳³⁵⁾は、会費一口一万円の個人会員(一口以上)、法人会員(十口以上)、学校会員、賛助会員(一口二千元)と、寄付金と特定寄付金³⁶⁾、冠奨学金³⁷⁾からなっている。2018年までは会費が一律して320-340万円だったが、2019年から468万円へと増加した。一方、寄付金と特定寄付金は2011年までは平均700万円を維持していたが、それ以後は徐々に減少してきて2018年には200万円台になり、例年2千万円前後の繰越金がこの時は1600万円に激減した。20年間、変わらず支援している会員が殆んどであるというが、これからは会員の高齢化が問題であろう。毎年、会員に年賀状を出しているが、ある日「母は亡くなったので、もう送らないでください」という連絡が娘から来たという。

奨学金の受給対象者を就学生とした理由は、日本に来て勉強している学生のうちでも、大学に在学している留学生は様々な恵沢を受けることができるが、民間日本語学校に通っている就学生は奨学金はもとより電車の定期券の学生割引すら受けられないという。李秀賢氏も高麗大学4年の一学期を終えて、就学生としてアルバイトをしながら生活していた。

2002年の第1回目の時は93名の就学生に30万円ずつ、第2回目からは56名に10万円ずつ渡され、2020年まで19回にわたり998人の就学生に奨学金が渡された。日本全国の日本語学校から選抜された就学生の国籍は、中国(442名)、韓国(242名)、ベトナム(106名)などアジアを中心に18ヶ国にわたっている³⁸⁾。奨学金を受けた学生達は、「アルバイトを減らして勉強ができた」「学費の足しになった」と感想を述べた。毎年10月に開催されるLHSアジア奨学会の「奨学金授与式」には韓国から両親が参席し、式典の冒頭に故・李秀賢氏を偲んで1分間の黙

34) 就学生とは、民間の日本語学校に通っている学生に対する在留資格である。

35) LSHアジア奨学会情報公開資料 <https://lsh-asia-s.org/disclosure/>

36) 確定申告ありで、特定寄付受領書が発行される。

37) 冠奨学金を出した日本語学校は、就学生を推薦できる優先権がある。

38) 前掲書13)、pp.176-177

俵があり、会長の挨拶、来賓(韓国・中国大使館)の祝辞、奨学生達に賞状授与、最後に父・李盛大氏の挨拶で終わる。授与式の後に交流会が行われるが、両親は奨学生と話ができるこの場を何よりも楽しみにしている。JAL本社で行われた講演で、母・辛潤賛氏は奨学会について「悲しみを新しい希望の光として誕生させた大切なもの」だとし、「(奨学生の)一人ひとりがまるで秀賢のように愛らしくて、『勇気を出して必ず夢をかなえるように』といつも祈っている」と語った³⁹⁾。

奨学会の会報「かけはし」は、2017年までは6月と12月に毎年二回出されていたが、前述したように繰越金が激減した2018年からは年一回の発行になった。会報の内容は、奨学生の作文(留学を決めた理由、将来の夢、日本での生活など)や奨学金授与式の模様、就学生の卒業後の進路先、就学生の生活の紹介、チャリティコンサートのお知らせやピース登山隊への募集などである。新大久保駅があるJR東日本は、この会報に広告費として一千万円を支援し、日本航空は2005年より毎年、奨学会の授与式に参加する両親の渡航費を支援している。

奨学金活動が10年目を迎えた2011年に李氏の両親が、2017年にはLSHアジア奨学会が日本の外務大臣から表彰された。また日韓修好50周年にあたる2015年には、LSHアジア奨学会の名誉会長である父・李盛大氏に「日本・大韓民国の友好親善及び相互理解の促進に寄与」したとして、日本政府から旭日双光章(きょくじつそうこうしょう)が授与された。李盛大氏は受賞した感想で「息子のお陰で父親までが勲章をもらったが、これは私がもらうものではなく、奨学会に寄付してくれている多くの方々がもらうべきものだ。もう15年近くになるのに寄付し続け、秀賢のことを忘れずにいてくれるのがとてもありがたい」と⁴⁰⁾述べて、生前に毎年、寄付してくれている人々に年賀状を韓国から送っていたという。

4. おわりに

日韓関係において政治や外交問題により草の根レベルの交流が漸絶される事が多い中、李秀賢氏の遺志を継ごうとする事業は20年間、変わることなく営まれてきた。本稿では、それを可能とさせた原因とこれからも李氏の影響を受け継いでいくことが持続可能かどうか

39) 会報『かけはし11号』(2007)LHSアジア奨学会、pp.2-5

40) 「特派員リポート@釜山-日韓関係を思う若者たち」『朝日新聞デジタル』(2015.8.4)

か考察してきた。

まず、可能とさせた原因については、李氏の事故を知った日本の国民から送られた李氏の家族への慰労の言葉と見舞金、それを受け取った李氏の両親が力を得て、「韓国と日本の架け橋」になりたいという息子の遺志を継いで就学生のためのLSHアジア奨学会を作り、共に運営してきたという経緯を通して、日本の国民と両親の絶え間ない交流が20年間の軌跡を可能にしたことが明らかになった。しかも最も根底においては、両親の人柄と功績に負うところが大きいことは、父・李盛大氏が死去した時に日本でも多くの人が追悼式に参加したこと、河野外務大臣のメッセージ、映画「かけはし」の制作者である中村氏の言葉「李さんの両親のように、変わらぬ姿勢で地道に誠実に取り組むことの大切さを伝えたい」から明らかである。

次にこれからも李氏の精神を受け継いでいくことが持続可能かということについては、日本の小学校の道徳の教科書に掲載されている李氏の話しを題材にいのちの大切さと李氏のとった行動を考える授業を続けている先生、高校の修学旅行で李氏の墓参をして勇気、人間愛、日韓の架け橋になりたいという彼の夢について学び、感じてほしいという先生達を通して、又それに参画した子供たちを通して、李氏の精神が伝えられていく持続可能な最も理想的な形であると考えられる。しかし先生が代わると教育方針も変わるので、確実ではない。李秀賢記念事業は日本国際交流基金が高校生を対象とした事業で唯一継続しているという程、重要だと認識しているので持続可能性がある。しかし研修後に同窓会などの集まりが行われず、研修者同志の関係が途絶えている現状は残念である。ドキュメンタリー映画「かけはし」は、李氏の精神が種となりそれを見た人達が自らも架け橋を作っていくとする方向性が見えるので、持続可能性が高いと考えられる。筆者自身も大学の授業でこの映画を上映する機会を設け、学生達と話していく場を作っていきたいと考えている。

一方、映画「あなたを忘れない」に対する日本のネティズンのレビューを通して、韓国の留学生の李氏ばかりに焦点が当てられ、救助しようとして共に亡くなった関根さんの存在が無視されているように感じている日本人がかなりいることが明らかになった。このような感情は日本の嫌韓感情と通じるものであり、看過してはならないだろう。

【参考文献】

- 張ヒョンジョン(2021)『李秀賢、1月の陽光』호밀밭, p.256
- 佐桑徹(2002)『李秀賢さん、あなたの勇気を忘れない』日新報道, pp.12-19, p.53, pp.64-65
- 澤田克己(2020)『反日韓国という幻想』毎日新聞出版, pp.101-107, pp.195-197
- 辛潤賛(2001)『息子よ! 韓日にかける「命の橋」』潮出版社, pp.1-5
- _____(2021)『息子よ! 韓日にかけた「命の橋」の20年』潮出版社, pp.163-199, pp.176-177
- 会報『かけはし11号』(2007)LHSアジア奨学会, pp.2-5
- ____『かけはし32号』(2018)LHSアジア奨学会, pp.3-5
- 『協会30年史:アイモ』(2017)釜山韓日文化交流協会, pp.84-87
- 俵木はるみ(2015)「日本の新聞に現れた『嫌韓』言説の意味への考察」『日本近代學研究』vol.50, p.126
- _____(2016)「日本の『嫌韓』に対する韓国と日本の認識に関する考察」『日本語教育』vol.78, pp.155-157
- 日本の新聞の検索: 翰林大学日本研究所(検索日: 2021.9.3.)
- 「君の勇気私たちも-韓国学生ら駅で救助死から6年」『朝日新聞』(2007.1.27.)
- 「韓国と私・逆境が作品の質高めた」『朝日新聞』(2007.2.27.)
- 「日本で研修した韓国人集う」『朝日新聞』(2008.7.5.)
- 「李氏の信念と勇気を伝えていく」『東京新聞』(2011.1.16.)
- 「新大久保駅救助死10年、父語る」『朝日新聞』(2011.1.27.)
- 「留学生の両親が道徳の授業見学 新大久保駅で救助死」『朝日新聞』(2013.1.30.)
- 「特派員レポート@釜山-日韓関係を思う若者たち」『朝日新聞デジタル』(2015.8.4.)
- 「日韓の懸け橋 遺志脈々-佐野高で交流会」『朝日新聞』(2016.2.1.)
- 「日韓かけ橋に映る遺志」『朝日新聞』(2017.2.2.)
- 「記録映画、11日から十三で上映」『朝日新聞』(2017.2.9.)
- 「日韓対立越える強い絆」『朝日新聞』(2019.6.1.)
- 日本国際交流基金H.P https://www.jpf.or.kr/index/s4/s4_3_2.php
- 内閣府大臣官房政府広報室「外交に関する世論調査」<http://survey.gov-online.go.jp/h26gaiko/zh/zll.html>
- yahoo japan 映画評価 <https://movies.yahoo.co.jp/movie/326060/>
- naver映画評価 <https://movie.naver.com/movie/bi/mi/point.naver?code=57666#tab>
- LSHアジア奨学会情報公開資料 <https://lsh-asia-s.org/disclosure/>
- ドキュメンタリー「かけはし」のHP <https://kakehashi-movie.net/>

논문투고일 : 2021년 12월 28일
 심사개시일 : 2022년 01월 16일
 1차 수정일 : 2022년 02월 11일
 2차 수정일 : 2022년 02월 18일
 게재확정일 : 2022년 02월 22일

 <要旨>

李秀賢氏の事故後の20年の軌跡への一考察

- 「韓国と日本の架け橋」として -

倭木はるみ

日韓関係において政治や外交問題により草の根レベルの交流が断絶される事が多い中、李秀賢氏の遺志を継ごうとする事業は20年間、変わることなく営まれてきた。本稿では、それを可能とさせた原因とこれからも李氏の精神を受け継いでいくことが持続可能かどうか考察してきた。

まず、可能とさせた原因については、李氏の事故を知った日本の国民から送られた李氏の家族への慰労の言葉と見舞金、それを受け取った李氏の両親が力を得て、「韓国と日本の架け橋」になりたいという息子の遺志を継いで就学生のためのLSHアジア奨学会を作り、共に運営してきたという経緯を通し、日本の国民と両親の絶え間ない交流が20年間の軌跡を可能にしたことが明らかになった。しかも最も根底においては、両親の人柄と功績に負うところが大きいことは明白である。

次にこれからも李氏の精神を受け継いでいくことが持続可能かということについては、国際交流基金の李秀賢記念事業で研修に参加した韓国の青少年たちを通して、ドキュメンタリー映画「かけはし」を通して、持続可能性が高いと考えられる。

A Study on Lee Soo-hyun's 20-year trajectory after the accident

- As a bridge between Korea and Japan -

Tawaragi, Harumi

In Japan-South Korea relations, grassroots-level exchanges are often cut off due to political and diplomatic issues, and the project to follow in Lee's footsteps has remained unchanged for 20 years. In this article, we have studied the reasons why this is possible and whether it is possible to continue to inherit Lee's spirit.

Lee's parents, who received condolences and condolences from the Japanese people after learning about Lee's accident, have established a "bridge between Korea and Japan" and established an LSH Asian scholarship for 20 years. Moreover, it is clear that most fundamentally, they owe a great deal to their parents' personalities and achievements.

Regarding whether it is possible to continue to inherit Lee's spirit in the future, I think it is highly likely that Korean teenagers who participated in the International Exchange Fund's Lee Soo-hyun Memorial Project, and the documentary film *Kakehashi*, will continue to do so.